寄せ太鼓

北九州市立長崎街道
木屋瀬宿記念館
運営協議会 広報部会
北九州市八幡西区木屋瀬
三丁目16番26号(〒807-1261)
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

第二回『木屋瀬の風景』写真コンテスト 入賞作品発表

おめでとうございます

【講評】木屋瀬は江戸時代に栄えた長崎街道の宿場町で、観光資源が沢山残されています。作品審査は、基本的にはピントが鮮明で、カラー写真の色合いを有りの儘に再現したものを基準に、選抜しました。そして、往事を偲ぶ古い町並みや建物、四季折々の風景や行事など、行ってみたくなる木屋瀬を紹介するに相応しい作品を選びました。前期は宿場踊り、後期は祇園の作品が多く応募されましたが、他の情景をモチーフの作品も歓迎します。

審査委員長　池田　正生

★ 金賞「踊れや踊れ宿場をどり」西山　京子 様

レンズの機能を活用した画面構成です。宿場踊りの熱演と町並みの情景を好アングルで撮影し、町並みの奥行描写も的確です。踊る人を主役に、三味や太鼓の演奏者を背景に組合せた構成は、賑やかな宿場踊りが楽しく表現されています。

第二回「木屋瀬の風景」写真コンテスト作品展開催中！

平成20年1月12日(土)～2月17日(日)
於：みちの郷土史料館

後期応募作品98点、前期入選作品20点、第一回入賞作品6点を展示しています。木屋瀬の魅力を再発見してみませんか!?

◆銀賞「緑日」　宝崎　義勝 様

ピントが鮮明で色調描写が優れています。夕刻の逆行撮影に補助光を上手に活用し、茅の輪のトンネル構図の中に、夏越祭の女性を自然体に表現しています。背景の鳥居や人物を添景に、主題が強調されています。

◆銀賞「祇園町通り」　有田　健二 様

懐古の趣を残す白壁の町並み風景です。家並みの陰と日当りの白壁のコントラストに、露出に苦心したと思います。うまく描写されました。奥の十字路辺りに町の人が小さく写っていれば、さらに臨場感を感じます。

●銅賞「大暴れ木屋瀬祇園山笠」　川島　亮 様

夜の祇園山笠の男衆の熱気を感じます。山笠に上がった男のポーズと、山笠の傾きが動感を力強く表現しています。補助光が強く当たり、法被や腹巻きの白い布地の質感が描写されなかったことが惜しまれます。

●銅賞「桜満開の西元寺」　中　賢一郎 様

春爛漫の季節感が描写されています。射光の太陽光を上手に利用し、立体感のある映像になっています。二人の人物も演出味を感じない添景で主題を引き立てています。快晴の青空なら、桜が強調されたと思います。

●銅賞「町の羊羹屋さん」　鈴木　初子 様

今も残る古い町並みの老舗の佇まいです。ここは、往時の宿場町の賑わいが偲ばれる町並みです。老舗の店先は、今昔混在の時を味わえる処です。店先に立つ女性と抱かれた坊やが、ふれ合っていれば…と惜しまれます。

「こやのせ座」三月の恒例行事　第七回「こやのせ座・能」を下記にて執り行なわせて戴きます。

演目は　仕舞が〔二人静〕と〔山姥〕能は　一ノ谷の合戦で討たれた平経正を弔う仁和寺の僧都・行慶の前に平経正の霊が現れ　琵琶の名器（青山）を奏するうちに修羅道の苦しみに陥ると云う修羅物の代表作〔経正〕ですが　初めてご鑑賞戴く方やお子様にも解り易い様　現代語訳本を配布の上　観世流能楽師・森本哲郎氏による解説もございますのでお楽しみ下さい。

又　未来を担う小・中学生に日本の古典芸能「能楽」を体験させ　日本の伝統文化に対する理解を深める事を趣意とする「親子お能教室」（無料）を今回も併せて開催致しますので奮ってのご応募をお待ちして居ります。

尚　当日には「こやのせ座」ボランティアによるバザー（うどん・ソバ・カレーライス・コーヒーなど）の用意もございますのでご利用の程　宜しくお願い申し上げます。

第六回 能 こやのせ座

■日時　平成20年3月2日（日曜日）　開演：午後2時（開場：午後1時）
■場所　北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館「こやのせ座 能舞台」
北九州市八幡西区木屋瀬三丁目16-26
■料金　全席自由・一般：前売3,000円（当日3,500円）
・学生（高校生以下）：前売1,000円（当日1,500円）
※ 入場は小学生以上に限らせていただきます。

チケットのお求めは
木屋瀬宿記念館　TEL 093-619-1149
ローソンチケット TEL 0570-084-008（Lコード89919）
TEL　0570-000-407（オペレーター予約）ローソン全店
※ 詳しい内容は、木屋瀬宿記念館へお問い合せください。

わたしの昔話 本陣

本陣とは、殿様たちが自分の城から一歩でも外に出るとそこはすべて敵陣であり、「いま自分はその敵陣に踏み込んでいる」という心構えになり、何かと緊張するのであった。昔から「男は外に出ると七人の敵が居る」と言われているが、共通するものがある。ともあれ、殿様が民家で時を過ごしたり外泊する場合、そこがどんな所であろうと殿様がいる間に万一の事が起こるとそこが殿様の指令本陣となり、応戦の本陣にもなるので城以外に殿様のいる所を本陣と呼んでいた。

木屋瀬宿の本陣は天理教会所（現木屋瀬宿記念館）の正門より右へ福田材木店までの間にあって、黒田侯の建設になる立派な公舎でもあった。「夜明け前」の小説を書いた島崎藤村の生家はそのまま本陣を務めることができる建て前であったので、中仙道では本陣を務め有名である。木屋瀬宿では本陣を務め得る家はなかった。こんな所では、その宿場を領有している殿様が本陣を建てることになっていたので、木屋瀬宿の本陣は黒田侯が建てられたものである。瓦には黒田侯の紋である「下がり藤」が浮き彫りされ館の要所要所には御紋金具が輝いていた。

本陣は堂々と東に向かって正門を据え、左右に脇門があり、北と南には略式門があり、西には裏門と勝手門があり合計七門があった。

大名上宿の時には正門に麻の幕、玄関には紫縮緬の幕を張り、大名の氏名を表した関札を立て、高張提灯が両側に立ちならぶ。

お供の武将を泊める民家では家紋を染めた木綿の幕を張り、お泊り武将の氏名を表示する。各戸に揃いの軒提灯が連なり、路面は新砂で清められ本陣前はすばらしく美しくなるのであった。

本陣七門の中のただ一門だけが、現在下町の永源寺の横門として大切に保存されているが、この門が本陣建造物の中で唯一残存している「木屋瀬宿本陣御門」で貴重な文化財である。歴史散歩をはじめ、いろいろな人々が木屋瀬宿の見学に来られているが、木屋瀬町民が胸を張って案内できる史跡の一つである。あの秋月城の黒門に劣らぬ風格をしずかに秘めて、古き良き木屋瀬の象徴となっている。

【柴田豊廣遺稿集】より

先ずは今回も天候に恵まれ　昨年を凌ぐ二万五千人をも超える人出で大盛況のうちに挙行出来得ましたことを　ご参画・ご協力戴きました木屋瀬住民の皆様方に心よりお礼を申し上げます。本当に有り難うございました。

“木屋瀬の歴史と文化を活かした町づくり”の趣旨のもと始められ　本年で十五回　当初は理解も得難く紆余曲折もありましたが　回を経るごとに「宿場踊り」を中心として筑前各地の伝承盆踊りが集結する「伝承盆踊りの祭典」へと発展を遂げ　今では「筑前木屋瀬宿場まつり」に招かれ出演する事が他地域の伝承盆踊り団体の励みとなりステータスとなる程の評価を受けるまでに成長して参りました。

当に　未来を見据えた本物志向の方向性と全て木屋瀬住民による企画・運営と云う大道を歩む実質内容を以って　名実共に“木屋瀬の歴史と文化を活かした町づくり”の根幹を担う一大行事へと育って参りました事を慶びと致します。

これからも　未来を担いゆく後進（青少年）の郷土の誇りのひとつとなる行事へと成長することを願い〔本物志向の継続〕と木屋瀬住民による〔自主企画・自主運営〕を信条として　熱き思いで取り組んで参る所存でございますので　皆様方にもご協力の程名何卒　宜しくお願い申し上げます。

「第十五回筑前木屋瀬宿場まつり」実行委員会　企画委員長　藤　嘉量

が終了しました

平成19年10月6日（土）～11月18日（日）

江戸時代後期に船庄屋を務めた改盛町の梅本家ご出品の、掛け軸や屏風、お膳や酒器など約90点をご紹介しました。期間中、1260人もの方にご来館頂きました。有難うございました。

～ 来館者のご感想（アンケートより） ～

◆なつかしい物があり、たいへん楽しかったです。◆木屋瀬の昔からの発展の様子がよくわかった。◆宿場町としての資料、大変立派なものでした。◆興味深く拝見しました。木屋瀬の歴史を知る上で、参考になる事大。旧家展、次回楽しみにしています。◆梅本家の私財に感銘。◆このような貴重な資料を保存管理するのは大変ですね。すばらしいと思います。◆

北九州風景（長崎）街道推進協議会について　～長崎街道でまちづくり～

北九州市の街道を活かしたまちづくりには、門司の「大里文化会」や小倉の「長崎街道小倉城下町の会」、黒崎の「曲里の松並木を愛する会」、私たち木屋瀬のまちづくり団体などが限られたテーマ、地域で活動してきました。

そのなかで、同じ気持ちを持つ人たちで情報交換や協力をしていくため、横のつながりの必要性を痛感し、平成19年3月にシンポジウムを開催し、ネットワークの会設立に向けて、第一歩を踏み出しました。テレビのコメンテイターとして有名な市川森一氏を招いてのシンポジウムでまちづくり団体のネットワーク化が提案され、その場で結成の運びになりました。会場からも、20団体以上もの会から賛同の声が上がり、その後の交流会も大いに盛り上がりを見せました。その後、長崎街道をキーワードに地域の歴史や文化を保存・継承し、にぎわいづくりを進めていこうと、市民グループや国土交通省、北九州市、観光協会などでつくる「北九州風景街道推進協議会」が10月17日に発足しました。

「北九州風景街道推進協議会」は、北九州に残る街道跡や、街道跡ではないが、門司港レトロ地区や皿倉山地区などを活動対象とする20以上の街づくり団体が中心となり、各団体のネットワークづくり、会員間交流のため、瓦版の定期発行や街道PRのためのホームページ製作、案内板、誘導板、共通マップづくり並びに共同イベントなどに取り組んでいくことになりました。

事務局は、江戸時代の町屋や石垣が残る木屋瀬宿跡から大正時代の建物もある門司港レトロ地区までの40キロの道などの魅力をまとめ、歴史や景観の活用を推進する国土交通省の「日本風景街道」に北九州おもてなしの「ゆっくりかいどう」と名づけて、10月にルート申請し、国土交通省から、11月26日にルート初認定を受けることができました。

今後、ホームページ、パンフレットの製作や案内板の設置、瓦版、共同イベントに積極的に取り組んでいき、電線地中化や歩道、車道などの道路の景観整備につなげていきたいと考えています。さらに、このネットワークを福岡県内筑前六宿や、長崎までつなげていければと思っています。

今後とも、歴史や文化に裏打ちされた誇りを持てるまちづくりを目指していきたいと考えています。皆様方のご協力をお願いいたします。

長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会
理事長　高宮歳継

長崎街道木屋瀬宿に休泊した大名や長崎奉行　其の三

木屋瀬みちの郷土史料保存会　松尾　良美

今を去る百六十年前の嘉永元年は、異国船が頻繁に日本の沿岸に出没する世情不安な時世であった。その八月に江戸より下向する長崎奉行稲葉出羽守一行が、黒崎宿より木屋瀬宿本陣に到着している。総勢百四十一人で、継立人馬は人足九十人と馬弐拾弐疋と記され内本馬拾壱疋と軽尻馬拾壱疋とある。幕府の定書では馬に乗せる荷物一駄四〇貫（約百五十キロ）を本馬といっており、軽尻馬とは空尻とも荷なしともいって人が乗って荷物をつけないものをいう。もっとも、五貫目（十八・七キロ）まで荷物はつけられる。

長崎奉行は幕府の職名で長崎の市政や中国・オランダとの貿易を司り、長崎勤番の福岡藩と佐賀藩の海上警備を統括していく。

この年の五月に、三千石取りの旗本稲葉清次郎が、旗本を支配する職の若年寄の補佐役である目付より昇任しての初めての赴任である。宿駅に準備を命じる先触が到着次第に黒崎宿代官より直飛脚を以て、木屋瀬宿駅に注進される。御茶屋では玄関前と門前に盛砂と陣幕を張りめぐらせ、東西の構口と御茶屋前に『長崎奉行稲葉出羽守様』の関札が掲げられた。奉行の到着前には、通行止めの人留めや不審者の取締の人改めが行われ、勿論代官・庄屋・御茶屋守達が羽織袴を着て、東構口まで出迎えたのである。

史料館に展示してある『諸通執行之定』には、長崎街道を公務で通行する大名や幕府の役人を送迎したり、休泊や人馬の継立を行う宿代官の心得書で、長崎街道通行者の最上格は長崎奉行と定められている。

本陣内に入った奉行の乗物（駕籠）は、玄関内の広い敷台に降ろされて、乗物から出て出迎えた人々の挨拶をうける。

奉行の乗物（駕籠）の前方を進む槍は鞘をラシャ・革・羽毛で飾り、奉行の着替え衣類を入れた挟箱は竹や板で挟んでかつぎ、黒漆で塗り緒を飾り金泥で奉行稲葉家の家紋を描いたものである。この槍と挟箱は「金紋先箱」と呼ばれて稲葉家のシンボルであるので、御茶屋の奥の居間に置かれたのである。

奉行一行の荷物には、寝具・雨具（手傘・長柄傘合羽）提灯・蝋燭・便器・刀箱から水桶・漬物桶・組板の炊事用具・風呂桶に至り、将棋・囲碁・鳥籠までの娯楽用具も携行している。

この「御下向達下宿割帳」に【一、陸尺：人数　九人　内指頭壱人】とあるのは、奉行の乗物を担ぐ四人二組と指図をする組頭である。また、乗替駕籠一棹人足三人とあるのは、奉行の乗換え用の乗物を運ぶ人足である。【一、乗馬　弐疋　人数　七人】とは、数拾日を費やしての道中であるので、長崎奉行は乗物から出てから騎馬で過ごすこともあるので、馬も連れての旅を続け、御茶屋内の厩小屋に繋がれた。次回は、宿泊した家来衆について述べたい。

御茶屋内の広い板敷の間に、
【一、公用方長持　一、公用方箪笥　一、納戸長持　一、武器長持　一、手元箪笥　一、夜具長持　一、勝手方長持】等が各々一棹。そのほか納戸両掛四荷・幕両掛一棹・合羽籠壱荷・挑灯籠壱荷・乗替駕籠壱棹が降ろされた。奉行の専用荷物であって、家来達も鎧の入った具足箱や衣服等を入れた旅用の行李である両掛や合羽籠など様々の荷を、人足に運ばせている。

当時の記録が残っている「御下向達下宿割帳」

伝統に育まれる子供えびす祭り

12月1日・2日と須賀神社にて磯野寛晃、木村治敦、末包大智、六車祥宏4名の子供えびす祭りが行われました。

今回の子供えびすは、木屋瀬の皆様の力添えがあったからこそ、行う事が出来たと心から感謝しております。頭の4名も、自分達の為にこんなに多くの人達が手伝い、祝ってくれた事を忘れないでしょう。そして大人になった時、自分の子供や木屋瀬の子供達の為に、頭の祝いをしてくれる事と思います。

最後になりますが、準備の段階から山笠解体までご協力いただき、又、多額な祝儀を頂き多くの方々に保護者を代表して、心よりお礼申し上げます。

世話人　六車太一

元服の意味をもつこの祭りは、昔は数えの11歳、現在では小学校4年生の男子を頭（かしら）と呼びお祝いします。

天候に恵まれた初日は、山笠を曳き、社宝を持って御神幸行列と町内を回りました。2日目は山笠を曳いた後、祝い膳につき、無事2日間の行事を終える事が出来ました。4名の頭は、2週間にも及ぶ太鼓、采振りなどの練習の成果を発揮して、元気いっぱい頑張り逞しくなったと思います。

今回、頭が4名と例年に無い少人数で、最初は祭りが出来るのかと不安でしたが、太鼓の練習の時は、5・6年生の先輩達が応援に来てくれたり、「人数が少なく大変だろう」と多くの方々がお手伝いして下さり、又、多数の祝儀を頂きました。

シリーズ　筑前木屋瀬宿　神仏めぐり

第十二回　八所神社

今回は木屋瀬地域の人達から「産土神社」として古くから崇められて来た、野面の八所神社を御正月に訪ねてみました。産土神社というのは、その土地の人々を守る神様です。木屋瀬小学校の前を過ぎ、国道200号線を横切り、高速道沿いに山の方に向かって行くと、八所神社の一の鳥居が左側の道路脇に建っています。

一の鳥居をくぐり真っ直ぐ進むと、二の鳥居があり、そこから急な石段の坂道です。途中に三の鳥居があり、石段を登りつめると、そこから平地の境内です。「鳥居」の語源は諸説あり、その一つが、鳥は古来霊魂を持ち運びする聖なるものであるという信仰から鳥の居るところは、神の降りてくる所として、鳥居が建てられたと伝えられています。「俗界」と「神域」を隔てる境界の門と考えられるでしょう。

私は木屋瀬に70年近く住んでいますが、本町の須賀神社には子供の時からよくお参りしていました。しかし八所神社にお参りした記憶がなく、今回初めての参拝でした。境内は森閑としており、西行法師が伊勢参宮で、「なにごとの　おわしますとは　しらねども　かたじけなさに　涙ながるる」と詠まれていますが、まさにその様な、居住まいを正さなければならないような雰囲気を感じる境内です。

八所神社の歴史は古く、稲作の始まった弥生時代からと推測されます。稲作は自然の影響をまともに受ける為、神への信仰が深まりこの場所を神地として敬い、この地域の人々が、その時々に神の降臨を仰ぎ酒食をともにしながら、御祭りしていたものと思われます。

西暦854年に、郷督古賀四郎左衛門に神託があり、日隅丘（現在地より西北3丁）に祠を営み鎮護八所神を祀り、嫡男源太丸（末松家先祖）に社職を譲る。

その際の譲り状が現在末松家に残っており、代々引き継がれて来ています。社殿横の由緒には、寛永年間（1640年）に、伊藤吉次（博多の豪商）が社殿を造営と書かれています。

伊藤吉次は木屋瀬出身で、悲劇の豪商として知られる、伊藤小左衛門の父で、木屋瀬の須賀神社を再興した伊藤宗伯の弟でもあります。

現在の社殿は昭和47年火事で焼失後、昭和50年に再建されたものです。消失以前の社殿は、天保6年（1836年）建築で、棟板に「野面村庄屋松尾正次郎、木屋瀬村庄屋中村叉市　宿庄屋中村源六等の名前にて、造営奉献」と記載されていました。又、境内の石灯籠には、「船庄屋梅本弥七郎、大庄屋格松尾写三郎正寛、宿庄屋高崎勘十郎」の名前が刻まれているのが読み取れます。現在、木屋瀬町の人達は八所神社とは疎遠ですが、江戸時代は、野面村と木屋瀬村の産土神社として、木屋瀬地域の人達の深い信仰を集めていた事が分かります。又、明治以前までは、寿福寺という仏教寺院も境内にありましたが、明治元年の明治政府の神仏分離令で廃寺となりました。

元旦や狼煙のあがる六ケ岳
初鶏や清めし手にて口すすく

（本町　野口靖彦）

〔こやのせ座〕正月の恒例行事として回を重ねる毎に盛んとなる《木屋瀬いろは歌留多》大会ですが　今年も総勢百七十名以上が参加して盛大に執り行われました。

因みに本年度の入賞者は（敬称略）●小学生の部の優勝〔篠原実・星ヶ丘小六〕準優勝〔梅本涼・木小二〕三位〔奥雅照・木小二〕同三位〔萩岩花蓮・木小五〕●一般の部優勝〔市丸季代子〕準優勝〔奥裕照〕三位〔上田峰敬〕同三位〔石橋礼子〕と云う結果でした。

さて　本大会の隆盛と発展性の大なるを　作者の〔不彫〕さんに心より敬意と謝意を表し　昨年は【〔岩井屋不彫さん〕の《木屋瀬いろは歌留多》】が作られた経緯・事由と本大会の開催趣旨をご説明させて戴きましたが　今回より作者〔不彫〕さんの紹介を其の足跡をも含めて認めさせて戴きます。

〔岩井屋不彫〕とは本名を岩尾四十三郎〔明治四十三年～昭和五十七年〕と云い　木屋瀬本町の造り酒屋・酒林岩井屋に生まれ七十二年間の生涯の大半を地方政界に身を置き北九州五市合併・北九州市誕生の功労者でありましたが　歌・俳句・絵画・版画などにも非凡な造詣が窺える文化人であり　こよなく郷土を愛し　兄の〔岩井屋金尊〕（本名・岩尾清兵衛　九大醸造学科卒業後　家業の若鶴酒造・岩井屋本店を継がれましたが・弟の不彫に勝るとも劣らず郷土木屋瀬への想い深き有識の人柄でした。）と共に当地・木屋瀬の伝統文化の保護・育成に努められました。

思えば　木屋瀬の孟蘭盆会の踊りが「県指定無形民俗文化財筑前木屋瀬宿場祭り」として今日有るのも　戦後途絶えた祇園山笠を復活すると共に地域住民がひろく参画する実行委員会主催として今日の振興に至るのも　途絶えかけた旧町内ごとの恵比須祭を全町御座として　又　本町六町の庚申祭・学神祭を輪番制として今日有るのも　岩井屋金尊・不彫兄弟を中心とする当地先人たちの熱き思いからなる創意工夫の賜物でございます。

最後に〔不彫〕さんが北九州市誕生成就時に万感の思いを読まれた句を紹介して今回のメと致します。

梅が香や垣根はらいしひろき庭

次回乞うご期待。

こやのせ座運営部会長　柴田泰助

［付録］金尊・不彫と申しますのは　正岡子規門下で知られる高浜虚子・青木月斗などと親交の深かった筑前植木水門楼の主・阿部王樹門下で有る処の俳号でございまして此れに「岩尾家の屋号・岩井屋を併せたものを　私使わせて戴いて居ります。

第七回　木屋瀬いろは歌留多大会　～岩井屋不彫の残した郷土木屋瀬への想い～